

マタイ福音書講話（9）

マタイ 4章 23～25 節【おびただしい病人をいやす】

23 節「イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病氣や患いをいやされた。そこで、イエスの評判がシリア中に広まった。」イエス様の伝道の拠点は、最初は会堂であった。会堂（ヘブライ語でシナゴーク）ではおもに祈りと律法・預言書の朗読と説教が中心であった。

24 節「人々が、イエスのところへ、いろいろな病氣や苦しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者など、あらゆる病人を連れて来たので、これらの人々をいやされた。」イエス様の伝道には、病氣の癒し、悪霊払いが伴っているという特徴があった。伝道にはこの二つが必要なのだと思う。ただ教えるだけではなく、病氣を癒すこと、悪霊からの解放をしなければならない。この力を教会は継承しているはずである。これは単に病人を憐れんだということだけではなく、神の国ではもはや病はなく、悪霊（罪の誘惑）からも自由であることのしるしであったと思う。

・「信じる者には次のようなしるしが伴う。彼らはわたしの名によって悪霊を追い出し、新しい言葉を語る。手で蛇をつかみ、また、毒を飲んででも決して害を受けず、病人に手を置けば治る。」（マルコ 16：17～18）

25 節「こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から、大勢の群集が来てイエスに従った。」ユダヤ人だけでなく、外国人もイエス様の評判を聞いて集まって来たという。これはやがてキリスト教がユダヤ人だけのものではなく、世界宗教になるひな形となっている。

マタイ 5章 1～12 節【山上の説教（5～7章）を始める】

1 節「イエスはこの群集を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。そこで、イエスは口を開き、教えられた。」イエス様が山に登り、腰を下ろすと弟子たちが近くに寄って来たというのは、ユダヤ教のラビ（教師）が弟子たちに教える時の姿勢である。イエス様は教師として語られる。教会とは単なる人間の集まり、仲良しクラブではない。キリストを中心にして集まる場所、キリストから学ぶ場所である。決して縦の交わり（神と人）より、横の交わり（人と人）を求めたり、中心にしたりしてはならない。横の交わりを求め始めると、その人は必ずと言っていいほど教会から消えていなくなる。

「そこで、イエスは口を開き、教えられた。」神は長い間沈黙しておられた。しかしここでその口を開き、隠されていた神秘を語り始められる、こうして詩編の預言は成就した。「神よ、わたしの若い時から、あなた御自身が常に教えてくださいるので、今に至るまでわたしは驚くべき御業を語り伝えて来ました。」(詩編 71:17) 人でもなく、天使でもなく、神御自らが、人を教えられる。畏れ多いことか。マタイは何という威厳に満ちたイエス様を描いていることか。

3節「心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである。」

「幸い」のギリシャ語原文は「マカリオス」である。これから続く九つの幸いはこの世の幸いとは違い、神から与えられる幸いである。

「心」のギリシャ語原文は「プネウマ (霊)」である。

●人間は魂と肉体の合成物であり、霊とは聖書では厳密には「聖霊 (神)」のことを意味している。日本人は「霊」という言葉を簡単に使い、木の霊、水の霊、人の霊などと表現する。日本人は聖霊を知らないから、聖霊の働きが万物に現れているのを、諸霊と勘違いしているのである。教父たちは人間というものを三部分 (精神・心・身体) から成るといっている。精神とは、魂のもっとも高度な能力のことであり、この能力によって人は神と交わることが出来る。また、心は感情をつかさどる魂の部分である。身体～心～精神というように深くなっていくのである。霊的なもの (神的なもの) は精神がそれを捕え、心に送り、身体がその影響を受けるというわけである。精神とか心というのは、この世での「魂の働き」のことであって、肉体が朽ちた後は、魂が残ると言い、精神や心が残るとは言わない。だから人間の構造論としては「肉と魂の合一体」と考えた方が、考えやすい。

そのように考えると、霊 (ここでは心と訳している) が貧しいというのは、聖霊が貧しいということになっていることになる。人は創造された時、「**命の息＝聖霊**」を鼻に吹き入れられた。しかし人が罪を犯し、神から離れた時、命を与える聖霊は去った。そこで人は死んだのである。死は魂と肉体の両方に及び、魂は命を求めてさまようのであるが、この世のいかなるものをもってしても、魂は満たされることはない。この世には命はないからである。命は神だけのものであって、人は聖霊を受けなければ満足することも、生きることもできないのである。だから自分の中に聖霊がないことを悲しみ、この世の何物にも満たされることなく、心から神に満たされたいと思っている人は幸いであるということになる。自分の欠け、自分の貧しさを知っている人は謙虚である。4世紀のクリュソストモスは「**心の貧しさとは謙遜をさしている**」といっている。神様は謙遜な者に天国を約束して下さった。

●「私たちが、主と共に自らを低くするなら、主と共に私たちも上げられるでしょう。…もしあなたが高い所に登りたいなら、降りることから始めなさい。」

…私たちが神秘をいただけるのは謙虚さによってです。この器なしに、あなたは生きている水を蓄えることはできないでしょう。つまり、聖霊、宴席のぶどう酒である聖霊はへりくだった人の中にしかお住みになれないのです。」
ジャン・イブ・ルルー「アトスからの手紙」より引用

4節「悲しむ人々は、幸いである。その人たちは慰められる。」

・「神の御心になかった悲しみは、取り消させることのない救いに通じる悔い改めを生じさせ、世の悲しみは死をもたらします。」(二コリント7:10)

悲しみにも二種類あると聖書はいつている。この世の悲しみと、神の御心になかなう悲しみである。この世の悲しみとは、この世の物を失ったことを悲しむ、自分の欲しい物が与えられないことを悲しむことである。そのような悲しみは死をもたらすという。つまり恨みと嫉妬と怒りを産むだけなのである。カインの悲しみを思い出そう。彼は自分の献げ物が神に受け入れられなかったことを悲しみ、その怒りを隣人に向けた。人生の悲しい出来事は人を神に向けさせる。それが人の目にどんなに悪く見えたとしても、善い事なのである。神に心が向くことが大事なのだ。神の御心になかなう悲しみとは、自分が罪深い者であること、罪を犯してしまうこと、人を赦し、愛せない者であることを悲しむ者は幸いであるという意味である。そのような人は神から赦しが与えられるので、慰められるのである。

●「涙は、流されることによってあなたを現実に引き戻してくれます。神に受け入れられるいけにえ、それは砕かれた心です。神はあなたの涙を求められます。…涙は心を清めるための神の賜物です。これは謙虚さの生きた水です。これを私たちの情感からくる涙や、世間一般の涙と一緒にしないでください。世間の人々は、あれこれのはかないものが奪われたとか、計画が実現しなかったとかで、すぐに泣きます。修道者は自分の怠惰や罪によって聖霊を失ったから泣くのです。彼はまた、主がいかに人を愛されたかを見、人々がどれほどかたくなで、不幸で、主に対し隣人に対して愛がないかを見て泣きます。…神は父です。神にまさる母もおりません。とある教父が言っていますが、この言葉こそ聞き、理解する者にとって多くの涙となるのです。キリストはエルサレムのために泣きました。もしキリストの心があなたに宿っているなら、すべての人のために涙を流すでしょう。本当の祈りとは、祈っていることを知らないものです。同じように、本当の涙は神のやさしさと威厳が、あらゆる方向から迫ってきた時、全く自覚せずに流れるものなのです。霊的涙は…神を見る事へと心を準備します。涙はあなたが洗礼のときに受けた恵みを新たにすることができます。「ああ、幸いなる涙、魂の新しい洗礼よ」とヨハネ・クリマコス(7世紀)は言いました。聖霊が与えて下さる涙は甘美で、静かです。それは苦痛も

なく、騒々しさもなしに目を流れます。これが本当に心をなごませ、いやす水です。あなたが部屋を出た時、誰もあなたが泣いたとは思えないほど、あなたの顔は喜びにあふれているのです。聖霊が与えてくださる涙は、…顔を輝かせ、神々しい輝きを目に与える聖なる油のようなものです。」

「アトスからの言葉」より引用

5節「柔和な人々は、幸いである。その人たちは地を受け継ぐ。」

柔和とは優柔不断や、決断力がないことや、八方美人のことではない。やさしく、穏やかという意味である。自分の感情や怒りをコントロールできる強さである。これは前の二つの「心の貧しい人、悲しむ人」と関係している。神の前に謙虚であり、自分の欠けを知り、罪を悲しむ人が自然に振舞う態度である。「モーセはその人となり、柔和な事、地上のすべての人にまさっていた。」(民数記 12:3) また、神様やキリストほど怒りを抑え、コントロールされた方はいない。

・「私は柔和で謙遜な者だから、私の轡を負い、私に学びなさい。」

(マタイ 11:29)

・「彼らの心は神に対して確かに定まらず、その契約に忠実ではなかった。しかし、神は憐れみ深く、罪を贖われる。彼らを滅ぼすことなく、繰り返し怒りを静め、憤りを尽くされることはなかった。神は御心に留められた。人間は肉にすぎず、過ぎて再び帰らない風であることを。」(詩編 78:37~39)

そのような柔和な人は地を受け継ぐという。「地」とはもともとは神がアブラハムに約束された契約の地、乳と蜜の流れる地でしたが、この世の象徴でもありました。キリスト教徒たちは、その忍耐と柔和によってローマ帝国を受け継いだのである。そしてその国はキリスト教が国教となった。

・「悪事を謀る者は断たれ、主に望みを置く人は、地を継ぐ。」(詩編 37:9)

・「神の祝福を受けた人は地を継ぐ。」(詩編 37:22)

・「主に従う人は地を継ぎ、いつまでもそこに住み続けることができる。」

(詩編 37:29)

・「主に望みを置き、主の道を守れ。主はあなたを高く上げて地を継がせてくださる。」(詩編 37:34)

そればかりでなく、私たちは神の国も受け継ぐことになる。もともと地も天も同じ神のものである。ゆえに地を継ぐことは、天を継ぐことのひな形なのである。神を神とする者に、神は御自分の大地を任せ、天の国も任せられるからである。神の子たちは父なる神のものを受け継ぐのは当然である。

・「この聖霊は、私たちが御国を受け継ぐための保証であり、」(エフェソ 1:14)

・「あなたがたは、御国を受け継ぐという報いを主から受けることを知っています。」(コロサイ 3:24)